



第65回千葉国体 弓道少年男子近的優勝

3人の結束で頂点を射止めた！

去る10月、千葉県で開催された第65回国民体育大会「ゆめ半島千葉国体」で弓道少年男子近的が見事、優勝の栄冠に輝きました。本県では33年ぶり、2度目の優勝です。メンバーは国体選手選考会3回の予選を勝ち抜いた古舘凌選手、女鹿口幸成選手、佐藤巧真選手の3人。学校はそれぞれ違っても、限られた時間を有効に使って結束力を培い、本県弓道界の歴史に残る快挙を成し遂げました。まさに夢をかなえた「ゆめ国体」。3人の選手と藤田直樹監督の喜びの声をお届けします。

ポイントは1回戦の広島戦 ここで勝てば波に乗れると思った

古舘 凌 (福岡高校3年)



国体では最初から優勝を目指していました。優勝が決まった瞬間は、ああ、試合が終わったという感じですがすぐには喜びの感情が湧いてこなかったけど、控え室に戻り、仲間の顔を見たらそれまで頑張ってきたことが思い出され、胸が熱くなりました。特に自分は去年の国体選手選考会の最終予選で落ちていたので、その分も嬉しかったです。

決勝トーナメント1回戦の広島戦が一番忘れられません。相手は予選1位通過のチームで接戦になり、引き分けから競射になった。その時の1本、ここで決めれば波に乗れると最も気合が入りました。

父や兄など周りに弓道をやっている人が多く、その流れの中で自分も始めました。先生の言うことを素直に聞き、それを実践しては欠点を修正していく。なるべく多くの試合を見たり、ビデオを何回も見て研究を重ね、自分なりに技術を取り入れて腕を磨いてきました。

弓道は1人の打てる本数が決まっているので、大会での1本1本はとてつもなく大きな意味がある。だからこそ、4本的に当てたときは喜びが大きい。後輩たちには、教えてくださる人、いつも応援してくれる地域の人たちに感謝の気持ちを忘れることなく、嫌になることがあっても決して雑にならないように基本を大切に、小さいことから積み重ねていってほしいと思います。

弓道は1人の打てる本数が決まっているので、大会での1本1本はとてつもなく大きな意味がある。だからこそ、4本的に当てたときは喜びが大きい。後輩たちには、教えてくださる人、いつも応援してくれる地域の人たちに感謝の気持ちを忘れることなく、嫌になることがあっても決して雑にならないように基本を大切に、小さいことから積み重ねていってほしいと思います。

優勝のイメージを大事に 練習を重ねてきた

女鹿口 幸成 (盛岡商業高校3年)



目標は優勝でしたから、いつも“優勝”のイメージを大事にして練習してきました。プレッシャーに弱いほうなので、普段の大会では結果を残せなかったんですが、国体という大きな大会で最高の力を出せたことに満足しています。

目標は優勝でしたから、いつも“優勝”のイメージを大事にして練習してきました。プレッシャーに弱いほうなので、普段の大会では結果を残せなかったんですが、国体という大きな大会で最高の力を出せたことに満足しています。

弓道は1人で打ちますが、その陰には仲間や大勢の人の支えがあります。チームでも1人1人に波があり、いいときもあれば悪いときもある。調子を崩したときはお互いに問題点を話し合い、励ましあってきました。3人は学校がそれぞれ違うので、7月にチームを結成した頃はぎこちなかったんですが、合宿や試合を重ねていくうちに心が知れるようになり、一緒に優勝を目指す中でかけがえのないチームになったと思います。

弓道は父もやっていたので興味がありました。高校に入学して部活を見学したとき、静寂の中で一心に的を見つめ、矢を放つ先輩の姿が格好いいと思った。静かなのに雰囲気はピリッと張り詰めている。弓道は技術だけではなく自分の精神面もはっきり出るんです。だから日常生活もきちんとしていないと本番で的に当たらない。そこが難しくもあり、面白いところ。性格的にも落ち着きや冷静さが養われ、自分も少しは成長できたと思います。

大学に進んでも今までの経験を生かして弓道を続け、次は青年男子の岩手代表として出られたらいいなと思います。



少年男子近的決勝トーナメント決勝 地元千葉を競射で下し優勝を遂げた岩手。
 (左から)古館凌、佐藤巧真、女鹿口幸成=千葉県匝瑳(そうさ)市・匝瑳高
 (岩手日報2010年10月4日付)



3人で目指した頂点に 到達できたことが一番嬉しい

佐藤 巧真 (黒沢尻工業高校2年)



チームの中では自分だけが2年生でしたが、学年の差は関係なく3人とも同じ「チーム岩手」としてまとめ、力を発揮することができたと思います。学校代表ではなく、岩手県の代表として選ばれた。

自分はそのことに責任と誇りを持ち、選手選考会で選ばれなかった3年生の分まで頑張りました。

大会で最も厳しかったのは1回戦の広島戦と決勝の千葉戦。特に千葉との戦いは競射に持ち込まれ、打つ本数も多く試合時間が長びいて最後は精神的な戦いになりました。優勝した瞬間はむしろ冷静で、控え室に戻って初めて優勝したんだと実感しました。この3人で目指した頂点に立つことができ本当に嬉しいです。

はかまをつけた先輩のりりしい姿に惹かれて弓道を始めました。弓道は運動部ほど激しくはなく、かといって文化部でもないところがちょうどいい感じです。練習でランニングがあったのは計算外でしたが。大会はたった4本の矢で争う。他のスポーツなら力の差が歴然と勝敗に出ると思うんですが、弓道はたとえ力が下でもその場で集中し、4本の矢を的中させれば勝てる。平等にチャンスがあるところが魅力です。

全国大会で優勝できたことは大きな自信になりました。この経験を学校の人に伝え、来年の岩手インターハイで「全国の中の黒工」として戦い、優勝することが今の目標です。

大会を振り返って

藤田 直樹 監督 (黒沢尻工業高校教諭)



弓道で国体に参加できるチームは、47都道府県のうち開催県を入れて19チーム。そのうち東北は2枠しかないので国体に出場すること自体が厳しい競技です。さらに予選から決勝トーナメント

に進めるのは8位まで。我がチームは8位で辛うじて予選を通りました。振り返れば、そこからずっとギリギリの戦いでした。決勝トーナメントは予選を1位通過した広島が1回戦。接戦の末、ここをやぶって波に乗ったと思いきや、ずっと苦しい戦いが続き、決勝の相手は地元の千葉。当然、優勝を期待して応援にも力が入っている。向こうの選手が的を射ようものなら大歓声が上がるといふ普段味わったことのない緊張感と重圧に耐え、優勝したことは賞賛に値します。選手1人1人がギリギリの戦いを重ねる中で強くなっていった。特に3年生は1年間多く弓を引いた分、最後の大会で力を見せ付けてくれました。

弓道は持って生まれた体格、身体能力、性別の差が他の競技ほどない。スタートラインはみんな同じ高校1年生からで、それから本人がどれだけ努力したかで結果が表れる面白い競技です。3人とも別々の学校ですからモチベーションを保つのは大変だったと思います。そういう中で自分たちは優勝するんだという高い目標を設定し、ひたむきに練習を積み重ねてきた。強い思いがあったからこそ優勝を引き寄せた。目標を達成したことは県内の高校生に「私たちにもできる」という夢と自信を与えたと思います。